

応急仮設住宅における個人領域の形成に関する調査研究

—— 尼崎市に建設された応急仮設住宅を事例として ——

三浦 研・和渕 大・小林正美*

*京都大学大学院工学研究科

要 旨

阪神大震災により尼崎市に建設された仮設住宅を対象として、領域形成と適応の関係を調べた。仮設住宅への環境移行は、個人領域と共有領域の双方を形成できることがスムーズな適応をもたらすことを明らかにし、災害後の住まいの建設においては、他者との関わりを促進させる、領域形成を促す設計の必要性を指摘している。

キーワード：応急仮設住宅、個人領域、しつらえ、阪神大震災

1. はじめに

応急仮設住宅については、これまで備蓄や供給といった物理的な側面に関する研究が行われているが、住まい方などに言及した研究は数少ない(牧紀男、1997)。こうした研究には牧らの研究や室崎・大西らの研究があるが、これらとて、断熱性、部屋の使い方、家族数といった、従来から建築計画で扱われてきた側面に焦点を当てたにすぎない(室崎益輝、大西一嘉他1989、1994)。しかし、いずれ出ていくことを前提とした仮設住宅の「住」水準に、従来の建築計画の尺度を当てはめて議論するだけでなく、果たしてどのように被災者が災害後の環境に適応していくのか、被災者の環境移行という視点から仮設住宅を必要がある。

災害に伴う心理的影響は93年の北海道南西沖地震以降、無視できない問題として取り上げられるようになる一方(藤森、1997)、仮設住宅に住むことのストレスも指摘されている(室崎益輝他、1996)。

本研究では、阪神大震災によって建設された尼崎市

の仮設住宅団地を対象として、個別的な聞き取りに併せて、一般性を調べる目的で71世帯にヒアリング調査を行い、仮設住宅という「仮」の環境に住むことの影響と実態を仮設住宅における領域形成から明らかにする。

2. 尼崎市における震災の被害状況

阪神大震災は、死者 6,425人、負傷者 43,772人、全壊家屋110,457棟、半壊147,433棟、一部破損230,332棟(自治省消防庁96年12月26日現在)という未曾有の被害をもたらした。このうち調査対象地である尼崎市では、死者49人(このうち市内で亡くなった人は27人であった)、負傷者7,131人、全壊家屋、10,902世帯、半壊50,191世帯、火災8件の被害を被った。住宅の損壊は木造住宅が中心であったが、武庫之荘地区では、RC造のマンションにも被害が及んだ。特に、築地、戸ノ内、東園田、JR尼崎駅北部、昭和通り・西大物地区の被害が顕著であった(図5-1参照)。地震直後の95年1月18日には避難者数のピー

クを迎え、市内91カ所に9494人が避難している（資料参照）。その後自力で住宅を確保できない被災者に対して、高齢者や障害者向けのケア付き仮設住宅が2カ所、48戸を含む応急仮設住宅が50カ所、2218戸建設された。

3. 調査の時期・方法

調査対象は、尼崎市に建設されたH仮設住宅団地である。H仮設住宅団地は、尼崎市に建設された仮設住宅団地の中でも、200戸（内58世帯が空き家）と規模が大きく、H9年の時点の入居率を他都市と比べて平均的であることから選定している。上記の目的を明らかにすべく、H9年8月29日から9月3日の間、調査を行っている。H仮設住宅は平成7年3月に建設されているため、建設から約2年半が経過している。全体的な動向を把握する目的で、ヒアリングによる聞き取り形式のアンケートを行う傍ら、了解の得られた世帯に詳細な聞き取りと図面採取を、住宅内のしゅうつらえの採取と個別の体験の収集を行っている（Fig.1）。

4. 調査の結果

本章では、被災者の属性、前住宅の概要、被災状況などの調査結果を示す。

4.1 被災者の属性

既に空き屋であった58戸（内2戸は死亡による）を除き、142戸に聞き取りによる調査を実施した。その結果、71票の有効回答を得た（留守宅は66戸、拒否は9戸であった）。回答者の男女の内訳は、男性23名、女性48名で、60歳以上は60名と全体の84.5%を占める。単身の世帯も40世帯と、回答者の半数を上回っている。このことから分かるように、仮設住宅に住む人の大半は、高齢の単身または夫婦という状況であり、震災後2年半を経て、一般に災害弱者と呼ばれる高齢者が多く残る実態が表れていると言える（Table .1）。

4.2 前住宅

回答者の前住宅の所有形式は、持ち家は5票（7%）と少なく、民間の賃貸住宅に住む世帯がほとんど（66

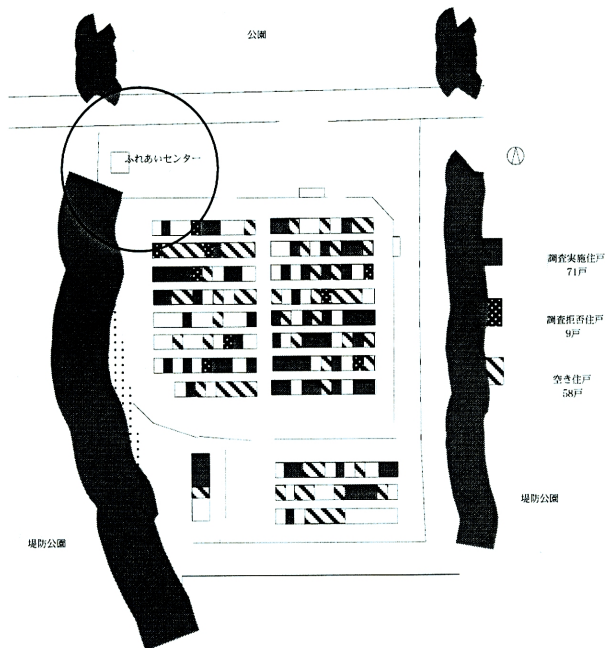


Fig.1 Layout of 'H' temporary housing development in Amagasaki city

Table.1 Surveyed population

		調査対象者の属性												
所有形成	住宅形式	1K	1DK	2K	2DK	3K	3DK	4K	4DK	5K	5DK	6K	6DK	その他
持家	5	1	2				1	2		1				
賃貸住宅	66	9		3				2	2	2				
	一戸建	9		3				2	2	2				
	長屋	2		2										
	文化住宅	38	3	27	2	3		1				1	1*	
	アパート	16	4	1	7	1		1			2			
	マンション	1			1									
合計	71	71	7	1	39	4	4	5	3	3	3	1	1	

*は、2Kの文化住宅を2戸借りていたケースである。

Table.2 Former housing size and style

調査対象者の従前の家屋														
年齢階級別人数	性別	家族人数					主な収入							
		計	男	女	1	2	3	4	5	貯金	年金	仕送り	生活保護	仕事
20~29	1	1			1									1
30~39	2	1	1				1	1						2
40~49	2		2			1			1					1
50~59	6	3	3		3	1	1	1			1			2
60~69	32	13	19		17	14	1			1	20			7
70~79	24	5	19		16	8					19			5
80~89	4	1	3		4						3	1		
合計	71	23	48		40	25	3	2	1		42	2	15	11

票、93%)である。賃貸住宅居住者の割合の多さは、過去の仮設住宅の入居者と比べた場合の著しい特徴である (Table.2)。

住宅形式については、文化住宅が36票と約半数を占め、次いでアパート16票、持ち家14票と続き、マンションはわずかに1票のみである。尼崎市では、倒壊した家屋の大部分が木造の老朽化した建物であったことを裏付けた結果といえる。

住宅の広さを尋ねた結果、2Kが38票 (54.9%) と最も多く、2K以下の住宅 (47票66.2%) を考慮すると、仮設住宅と同等かそれ以下の広さの住宅が大半を占めていたことが分かる。賃貸住宅の割合の高さと住宅面積の狭さは、雲仙や奥尻の仮設住宅の入居者の前住宅と比べた場合の大きな特徴である。

震災から仮設住宅への入居までを時系列的に明らかにするため、仮設住宅に入居するまでの主な避難先を尋ねた結果、回答者の約半数 (34票、47.9%) が学校の体育館を避難先とし、次いで肉親・知人宅 (23票、32.4%) の順である。一方、避難所のプライバシーのない集団生活よりも、壊れた家で危険な生活を敢えて続けるケース (7票、9.9%) や、震災直後から入院した例 (3票、4.2%) も見られた (Figure.2)。

4.3 被災状況

調査した71票のなかには、震災で肉親を亡くした方

は含まれなかった。住宅の被災程度については、全壊58票 (81.6%)、半壊が13票 (18.3%) である。ただし家財について、「全く持ち出せなかった、ほとんど持ち出せなかった、ある程度持ち出せた、無被害」の4段階での被害状況を質問した結果、「全壊」と答えた回答者のなかにも、家財を「ある程度持ち出せた」が27票、「無被害」が5票、「半壊」と答えたなかにも「ほとんど持ち出せず」が4票、「ある程度持ち出せた」が4票である。こうした乖離は、同じ「全壊」の判定にも、実際の被害状況に幅があったこと、また地震後、家財の保管場所がなく、倒壊した家屋から十

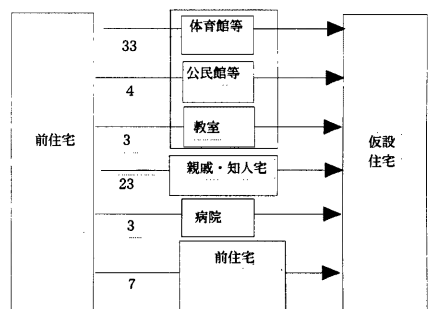


Figure.2 Refugees' relocation process to temporary housing units

Table.3 Relation between housing damage and [Kazai]

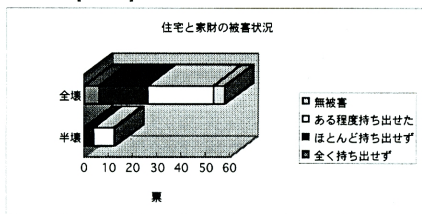


Table.4 Relation between impression and relocation process to the temporary housing units

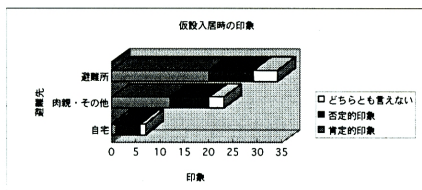


Table.5 First impression to the temporary housing units

肯定的印象

やっと子供と落ちつける (女性・27歳)、やれやれホッとした (女性・66歳)、雨露しのげるだけでもよい (女性・70歳)、広くてホッとした (男性・57歳)、ありがたい (男性・66歳)、案外上等一人で住むにはちょうどいい (女性・82歳)、ああええところに入れてくれるんやな (女性・69歳)、息子のところが落ちつかなかったのでやれやれ (女性・70歳)、もう一度一人で住めるのでうれしくて泣いた (女性・77歳)、空気がよくて静か (女性・66歳)

否定的印象

不便で涙が出そう (女性・73歳)、こんなところに住まなあかんのか (女性・74歳)、養鶏場を思い出して鶏になった気分 (男性・56歳)、鳥流しにあったよう (女性・67歳)、ぬかるみがひどい (女性・60歳)、何もなく心細くさいみしくひとりぼっちになった (女性・70歳)、寂しい砂漠のよう (女性・56歳)、西も東も分らず不安 (女性・58歳)

分な家財を取り出すことができなかつた等の理由が挙げられる。家が壊れることと同様に、財産である家財を持ち出せたかどうかは、災害による喪失として重要である (Table.3)。

4.4 仮設住宅への入居

仮設住宅にはじめて入居した際の第一印象を尋ね、入居時の第一印象を、肯定的印象、否定的印象、そのいずれでもないものの3つに分類した。

肯定的印象は、「落ちついた」といった生活の安定や、「ようやく一人で住める」など、プライベート

を確保できたことによる安心感、「案外悪くない」といった印象であり、一方、否定的印象には、見知らぬ土地の「不便さ」「不安」「さみしさ」に起因した印象である。また、肯定・否定のいずれでもない印象には、「特になんとも思わなかった」、「安心と同時に不安だった」「避難所よりました」等の印象である。

全体の傾向を見ると、仮設住宅に対する肯定的印象が37票 (52%) と半数を占め、否定的印象は24票 (34%) と、肯定的印象の方が否定的印象を上回る。しかし、仮設住宅の入居時の仮設住宅の印象を避難先と関連させたのが (Table.4) である。避難先が小学校の体育館や公民館といった不特定多数の集まる場と、肉親・知人宅・入院先に身を寄せた場合、壊れた自宅でのそのまま生活を比べた場合の3ケースについて、仮設住宅に感じた印象を比較すると、避難所から仮設住宅に入居した場合、肯定的印象を受けた人の割合が高く、逆に壊れた自宅でのそのまま生活した後に仮設住宅に入居した場合に否定的な印象が多い。これには、仮設住宅に入居するまでの過程が影響していると考えべきである。

5. 仮設住宅における領域の形成 (個別の事例)

さて以下では、仮設住宅における意識と個人領域の形成を典型的に表し得ると考えられる例を取り上げ、他の例も含めていくつかの視点から整理し、考察する。

5.1 期限の設定と個人領域の形成 (Fig.3)

仮設住宅はいずれ出ていくことを前提とした期限付きの住宅であり、当初は最長でも2年が限度とされていた。その後、2年の期限内に仮設住宅を解消できる目的が立たないため、年ごとに契約を延長する措置が採られ、入居者は毎年契約期限を更新しているのが現状である。

こうしたいずれ出るという仮すまいの意識は、仮設住宅に定められた一つの宿命でもあり、仮住まいという意識が家具や家財の配置に現れている例は、

(Fig.3)に限られた特別な事例ではなく、多くの世帯で大なり小なり現れている現象である。仮住まいの意識が、「壊れたままの家具を使う」、「引っ越してきたままの状態でも荷物を開けないで生活する」、「いずれ仮設から引っ越すことを考えて、買い控える」、「絵などを壁に掛けないで立て掛ける」、「釘を打たないでテープ等で貼る」といった行為として現れている。仮のすまいに対する限定された働きかけは、将来の喪失を見越した防衛的な反応であると言え

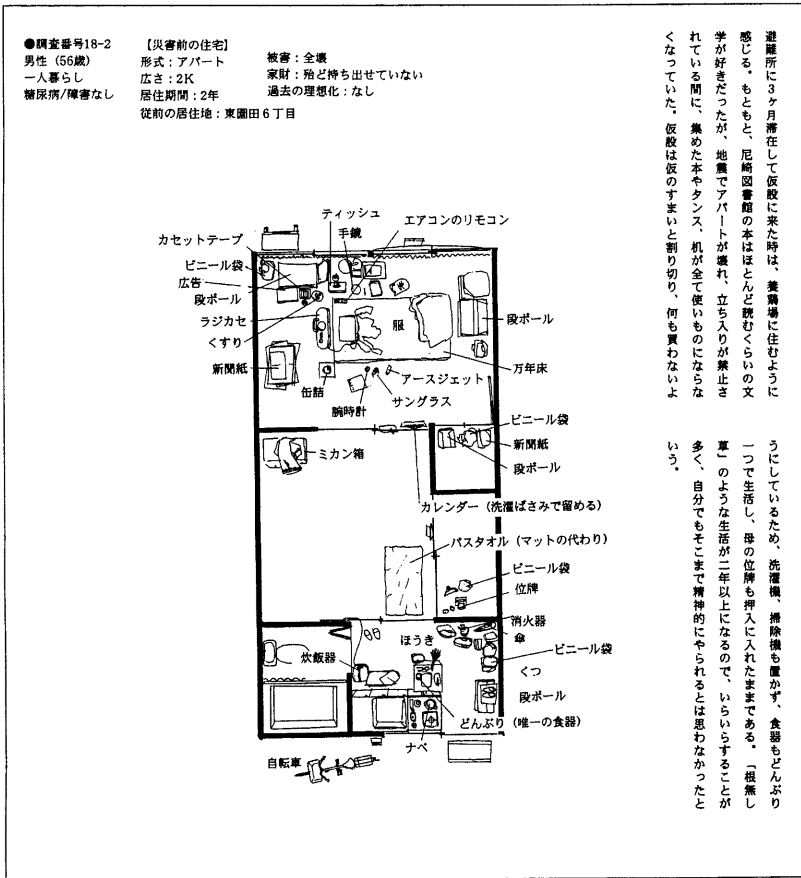
るが、3年近くもこうした意識に基づいた仮すまいの生活を送ることが、精神的なストレスをもたらすのは、(Fig.3)に限られた特殊な出来事とは言えないであろう。

5.2 他者との関わりの変化と個人領域の形成 (Fig.4)

仮設住宅への入居が人間関係の変化と領域形成の関連している例が見られた。近隣や地域の人間関係は場所に依存している。仮設住宅への入居によって、災害前の地域との距離が離れると、人的な交流は減少しがちである。私たちの人間関係は、肉親や長年の知人と

いった強い絆の結ばれた関係だけでなく、日常のささいなつながりを主体とする交流によって、人間関係の豊かさを維持している。それ故、肉親や長年の知人とといった強い絆で結ばれていないような関係の場合、交流が減ることがある。住宅内のパーソナライゼーションには、環境との関わりが現れるが、他者との関係もそうした環境の要素の一つであり、人を迎え入れるセッティングとして、座の取り方や、清潔さといった個人領域の形成に現れてくる。従って、仮設住宅への入居によって、人が訪れなくなれば、人を招かないことを日常とした住まい方に、住宅内のセッティングが変化する。(Fig.4)のケースでは、テーブルが引越

Fig.3 Personalization in temporary housing unit: case18-2



したままの段ボールの山と並び、そうした関係が絶たれてすまいを訪れるひとの少なくなった例である。

5.3 厳しい境遇におけるポジティブな働きかけ

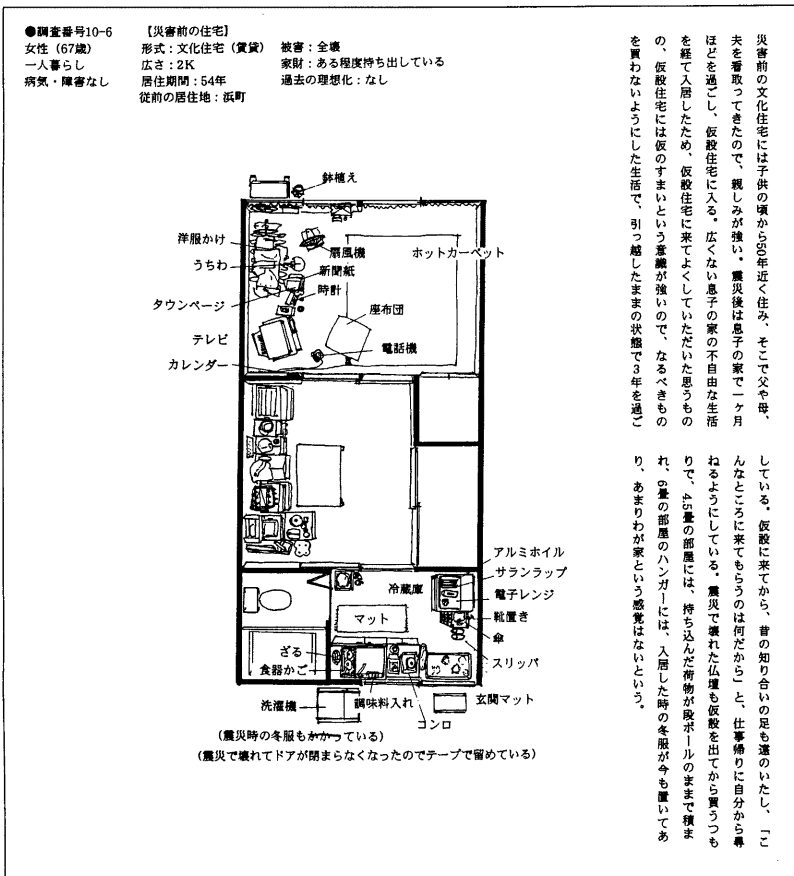
(Fig.5) 仮設住宅は、災害救助法の主旨で述べるところの「自ら住宅を再建する資力のない被災者」を対象とした、社会福祉措置的性格の災害援助である。そのためどうしても、経済力のある人から先に脱出し、お年寄りや公的に生活を援助されているいわゆる災害弱者が最後まで仮設に残されることになる。長年、自らの力で生活してきた人にとって、災害が理由であるとはいえ、援助される身になること自体、個人の尊厳

に関わる重要な問題であるし、プライバシーの少ない長屋住まいで顔を会わせて生活していくなかには、人間関係の上手く行くケースとそうでないケースが生じるのも当然と言えるだろう。ケース13-4は、仮設住宅に住むという試練に果敢に挑戦しよう個人領域に働きかけている例である。期限が設定されていて、人間関係も厳しい場合に、せめてでも自分の領域に意味を見いだそうと積極的な働きかけを行っている。

5.4 ポジティブな働きかけとネガティブな働きかけの混在 (Fig.6)

「住む」ということは、そこに働きかけ、物理的に

Fig.4 Personalization in temporary housing unit: case 10-6



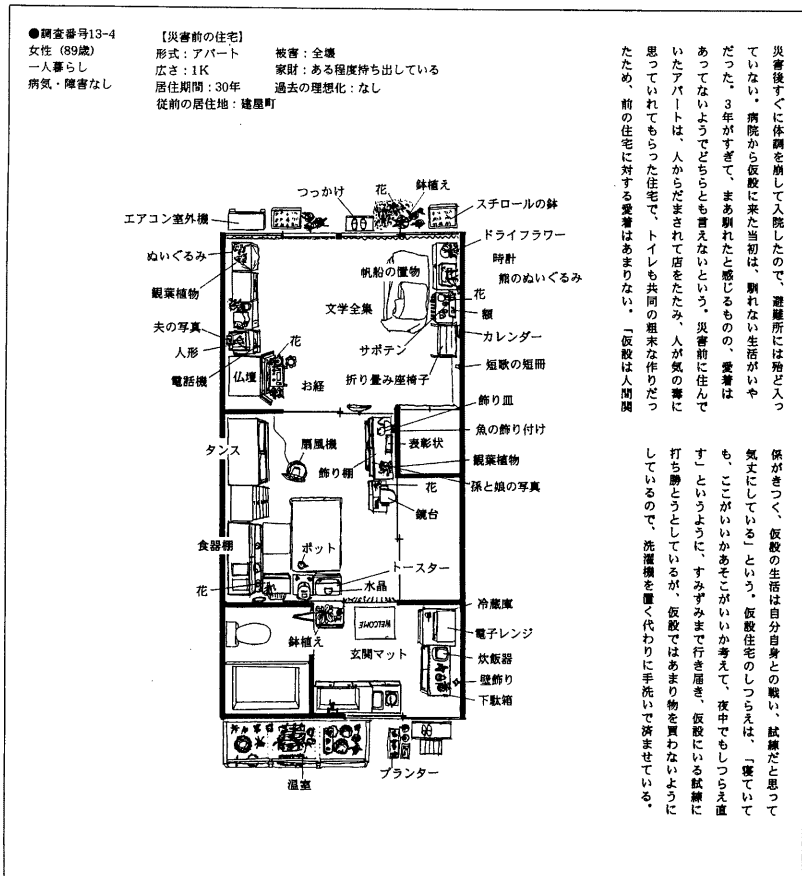
居心地のよいように改編したり、自己を投影することによって、住まいをパーソナライズしていくことである。仮設住宅を全く気に入らなかつたり、逆に仮設住宅が離れ難いほど気に入るような極端な場合を除くと、多くの入居者は、仮設住宅という環境にどっぷりつかるとはならず、限定した受け入れ方をしている。つまり、馴れるに連れて、自らに居場所としての認識を伴うのであるが、その一方でいずれ出ていくことも意識して生活している。このため、仮設住宅に対して、ポジティブに働きかけている部分と、ネガティブに働きかけている部分が混在している例が見られる。ケース@では、仏壇や亡き主人の遺影を飾ったり、置物や人形を飾っているものの、表札やその他の写真な

どは積み重ねた段ボールにしまったまま、使うものだけ取り出して生活している。また、どうせ二年だから釘を打たないでピンしか使っていない。このように、徐々に仮設住宅という環境に適応しつつある場合には、こうした積極的な働きかけと消極的な働きかけが並行してなされていることは珍しくない。

5.5 環境の変化と生活 (Fig.7)

災害前と仮設住宅の住環境の違いが、生活に影響している例が見られた。環境の一要素には、室内だけでなく外部の共有領域のあり方も含まれる。阪神大震災では、倒壊した家屋の多くが、老朽化した木造住宅だったと言われている。調査した71世帯のなかでも、

Fig.5 Personalization in temporary housing unit: case13-4



えて荷物を開けないでいるか」「花を生けているか」「絵に入った家具・置物を置いているか」「絵を掛けているか」「写真を飾っているか」「釘を打っているか」に関して尋ねた。また震災による家財の被害がどのように表れるのか明らかにする目的で、意識に関わる指標として、「気に入った家具や置物を置いているか」という項目と、恒久住宅に転居する予定がどのように影響しているかを見る目的で「いずれ転居することを考えて、新しく物を買わないようにしているか」という項目を尋ねた (Table.6)。

その結果、避難所では見られなかった「庭先に鉢植えを置く」行為が40世帯 (56.3%) で見られるのは

じめ、「表札や名札を出す」、「花を生ける」、「絵を掛ける」といった働きかけが見られるものの、震災によって荷物を「全く持ち出せなかった」か、あるいは「殆ど持ち出せなかった」場合は「気に入った家具・置物を置いていない」とする回答が目立ち、「ある程度持ち出せた」場合と比べて大きな差として震災による影響が個人領域に表れている (Table.7)。

また「いずれ転居することを考え、荷物を開けないで生活している」と回答した世帯が25票みられ、「いずれ転居することを考えて、新しく物を買わないようにしているかどうか」という設問に対しては、56票 (78.9%) が「新しく物を買わないようにしている」

Fig.7 Personalization in temporary housing unit: case 17-6

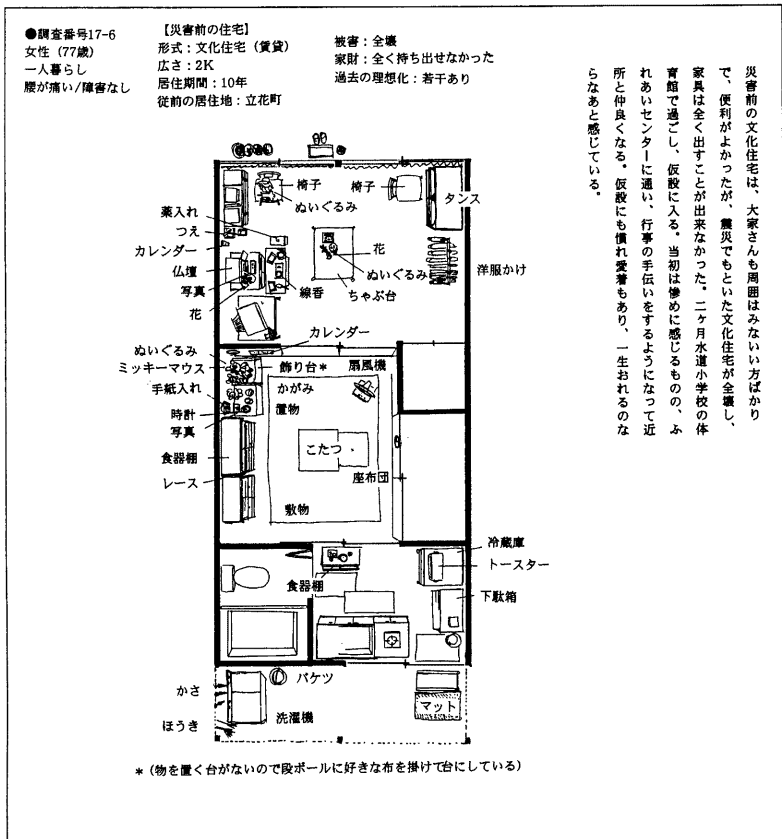


Table 6. Tendency of personalization in temporary housing units

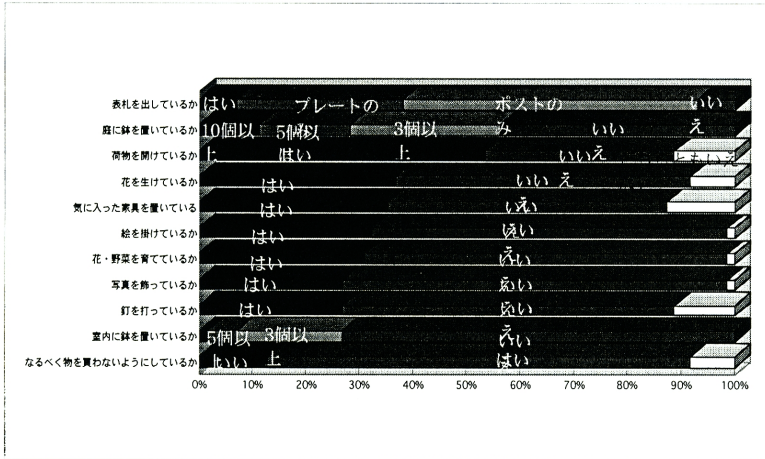
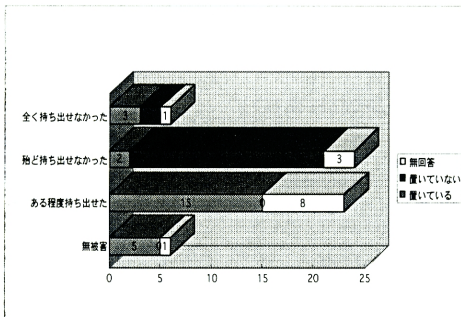


Table 7. Relation between damage of personal stuff and favorite furniture in temporary housing unit



と回答している。こうした結果は仮設住宅という出ていくことを前提とした住宅において、居住者の側も限定された働きかけをしていることのと表れといえる。

「新しく物を買わないようにしている」と回答したケースについて、仮設住宅で買わないでいる物を具体的に尋ねた結果が、(Table.8)である。仮設住宅の生活を仮のものと考え、家具の一部、あるいは全部を買わないでいる例や、地震で壊れた家具をそのまま使用している例(食器棚のガラスが割れたまま、上下のタンスの一部など)、また掃除機や洗濯機といった電化製品を買わずにいる例、仏壇を買わないでいる例、ベッドを買わないでいる例の他、地震によって物を所有することへの価値観の変化や、地震時に倒れてきた家具の恐怖から極力背の高い家具を置かないようにしているなど、住宅内のセッティングに地震体験が影響している例も見られた。

以上をまとめると、仮設住宅という個人的な領域を

獲得したことで、避難所では見られなかった自己を投影する働きかけが現れるものの、仮設住宅といういざれ出ていくことを前提とした環境において、その働きかけも一時のものでしのごうとする例が見られ、住宅に対する働きかけも限定されたものとなることが示された。

7. 仮設住宅における領域形成と注意意識の関連

仮設住宅を自分の居場所であると認識しているか調べるため、「わが家と感じる」度合いを(すっきりわが家と感じる、まあわが家と感じる、どちらとも言えない、あまりわが家と感じない、全くわが家と感じない)の5段階で尋ね、各段階ごとの住まいへの働きかけを対応させたのが (Table.9) である(「すっきりわが家と感じる」という回答はなかった)。

その結果、わが家と感じる場合の方が感じない場合

Table 8. Lack of stuff in the temporary life in temporary housing units

- ・家具
 - 冷蔵庫は新しく買ったが家具や食器棚は壊れたまま使っている (女性・64)
 - 食べ物しか買わない。家具は買っても置くところがない (男性・70)
 - 水屋、下駄箱もカラーボックスで代用している (女性・65)
 - 食器棚とか壊れたまま使っています (男性・65)
 - 仮設では安全のために1m以下の高さの家具しか買っていない (女性・65)
 - 家具類すべて (男性・73)
 - 家具は一切買わない (男性・73)
 - タンス、テーブル (女性・66)
 - こたつ、水屋 (女性・71)
 - 水屋も壊れたまま使っています (男性・68)
 - 家具など一切買っていない (女性・27)
 - 壊れた物で買ったのはテレビだけ (女性・69)
 - 仮設では何一つ新しいものは買っていない (女性・72)
 - ここでは最低限にしてあるもので済ませている (女性・67)
- ・電気製品
 - 大きな冷蔵庫が入らないので、新しく小さな冷蔵庫を買って使っている (男性・63)
 - 洗濯機、掃除機、テレビなど、ここではちゃん一つの生活です (男性・56)
 - 洗濯機を買う。仮設では手洗いになっている (女性・89)
- ・仏壇
 - 引っ越したら仏壇を買おうと思っている。地震で物を持っていてもしょうがないと感じたので、これから道具は買わない (女性・66)
 - 仏壇を買う (女性・67)
- ・ベッド
 - ベッドを置きたいが狭いのであきらめている (男性・75)
 - 夫が咽の手術をしているので介護用ベッドを買いたいスペースがない (女性・45)
 - ベッドを買おうと思っているが今のところあるもので済ませないと思う (女性・53)
- ・その他
 - お金がないから買わないでいる (女性・62)
 - 恒久住宅に移って様子を見てから買う (女性・66)

Table 9. Relation between feeling of "at home" and personalization in temporary housing units

質問事項	まあわが家と感じる (31票)	どちらともいえない (7票)	あまり感じない (15票)	全く感じない (18票)
表札を出している	■			
なるべくものを買わないようにしている	■			
屋外に鉢植えを置いている	■			
部屋の中に引っ越してきたままの状態 で開けていない荷物がある	■			
部屋に花を生けている	■			
屋外で野菜・花を育てている	■			
部屋に絵を飾っている	■			
家に気に入った家具や置物を置いている	■			
部屋に写真を飾っている	■			
釘を打っている	■			
部屋に鉢植えを置いている	■			

よりも、全般的に積極的な働きかけをしている。表札も名札も出していない場合は、わが家と感じる場合には皆無であるのに対して、そうでない場合にそれぞれ1票づつ見られる。またわが家と感じると答えたグループの方が、屋外の鉢植えを置いたり、野菜や花を育てるなど、共有領域への関与に積極的である。逆に、

わが家と感じないと答えるにつれて、引っ越してきたままの状態が開けていない荷物が部屋の中に置かれている割合が増える。調査中、花を植えようにも、仮設住宅に砂利が敷かれているため、適当な場所が見つからないという意見があった。しかし、空いたスペースでは、花づくりや菜園などが行われている (Photo.

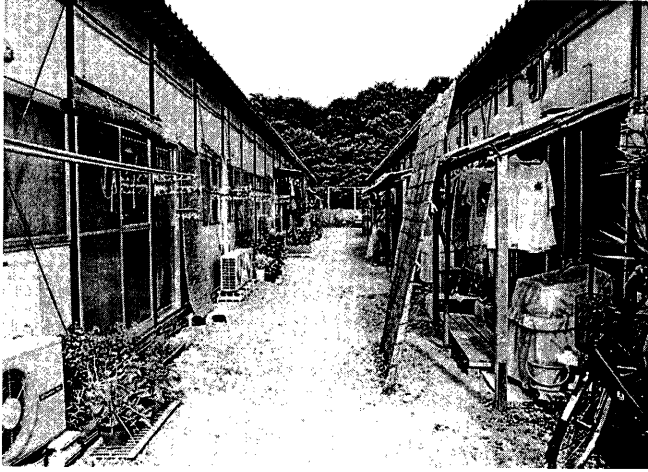


Photo 1. Flower pots is planted by the path in temporary housing units

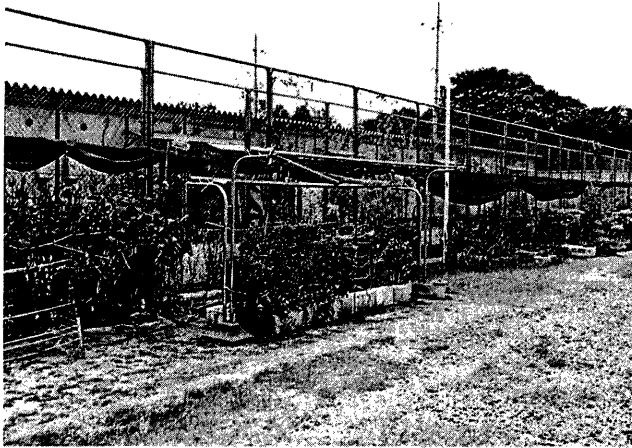


Photo 2. Open space tickeles semi private activity , and used as farm.

1)。ヒアリングで聞かれたように (Figure.7)、こうした共有領域での活動がコミュニティの形成に役立つことを考慮すると、ふれあいセンターだけでなく、現状では住戸の余白となっているスペースをどのように設計していくかが、今後の仮設住宅の課題といえる (例えば、現状では南面配置を行うため、片側アクセスとなり、共有領域を形成する上では、建築計画上不利である)。

8. 注意識に影響するその他の要因

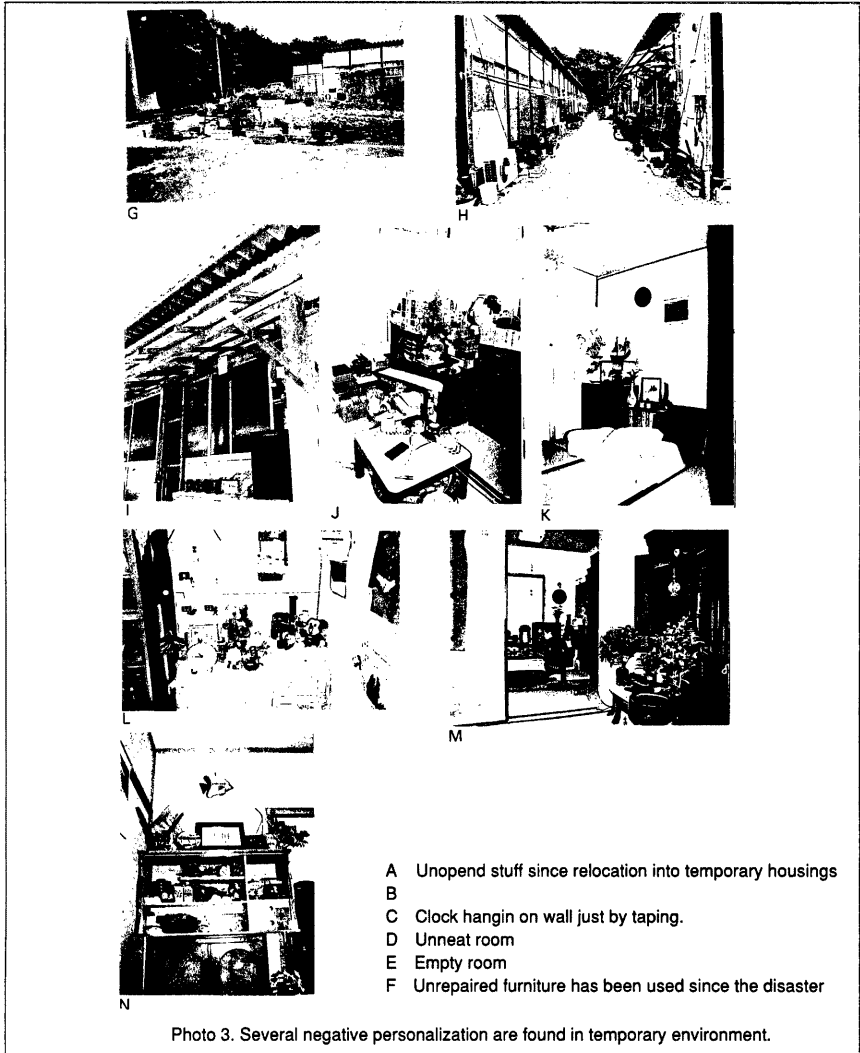
新しい環境に上手く適応するには、様々な要因が関わることが知られている (外山義、1997) 。その一例が前の環境と移行後の環境の差である。言うまでもなく、環境が良くなる場合の方が、新しい環境に適応しやすい。前節では「わが家」として自己の居場所としての認識と領域形成の関連を論じた。ここでは、領域形成以外の要因として、仮設住宅への慣れ、前住宅の所有形態、前住宅に対する愛着、前住宅と仮設住宅の比較、今後の住宅の予定、回答者の性別、家族の障

害の有無、家族形態、近所つきあい、ふれあいセンターの利用状況と「わが家感」を対応させた (Table. 10)。

「仮設住宅への慣れ」との関連では、「まあわが家とを感じる」場合に「すっかり馴れた」が5票あるのに対して、逆に「全くわが家と感じない」場合に「全く馴れない」が1票みられ、「わが家感」と「慣れ」が結びつく結果を示している。

災害前の環境との関係では、「前住宅の所有形態」

は、わが家感と関わりなく、いずれも持ち家の割合は低い。「前住宅に対する愛着」と「わが家感」を比較では、「全くわが家と感じていない」場合の方が災害前の住宅に「強い愛着」を抱いており、災害前と現在の心理的「移行」がわが家感に影響していると考えられる。これは、前住宅と仮設住宅の比較により鮮明に現れている。仮設住宅に対して「まあわが家と感じる」グループでは、38.7%が「仮設住宅の方が断然よい」と答え、逆に「災害前の方が断然よい」とする割



- A Unopened stuff since relocation into temporary housings
- B
- C Clock hanging on wall just by taping.
- D Unneat room
- E Empty room
- F Unrepaired furniture has been used since the disaster

Photo 3. Several negative personalization are found in temporary environment.

Table 10. Relation between feeling at home and daily life

	まあわが家と感じる			どちらとも 書えない	あまりわが家と感じない		全くわが家と感じない	
仮設住宅への慣れ	すっかり馴れた	まあ馴れた	どちらとも書えない	まあ馴れた	まあ馴れた	あまり馴れない	まあ馴れた	全然馴れない
前住宅の所有	あり			なし		なし		なし
前住者	強く感じる	まあ感じる	全く感じない	まあ感じる	まあ感じる	まあ感じる	全く感じない	全く感じない
比較	どちらとも書えない あまり感じない			どちらとも書えない		どちらとも書えない		どちらとも書えない
今後の予定	災害前の方が断然よい どちらとも書えない 仮設の方が断然よい			どちらとも書えない		災害前の方が断然よい		災害前の方が断然よい
回答者の性別	決まっている			決まっている		決まっている		決まっている
障害	あり	なし		あり	なし	あり	なし	あり
家族形態	1	2	3, 4, 5	2, 3		2, 3		2
近所つきあい	よく立ち話などする			あまり距離がない		あまり距離がない		あまり距離がない
ふれあいセンター	毎週利用する	たまに利用する	あまり利用しない	毎週利用する	毎週利用する	あまり利用しない	毎週利用する	全く利用しない
病気	あり	なし	全く利用しない	あり	なし	たまに利用する	あり	たまに利用する

合は、12.9%にすぎない。これに対して、仮設住宅に対して「全くわが家と感じない」グループでは、「仮設住宅の方が断然よい」とする回答はわずか0.55%で、逆に「災害前の方が断然よい」とする割合は、66.6%に跳ね上がる。「災害前と現環境との比較」は、わが家感と大きく結びついている要因である。

将来の展望と「わが家感」の関係では、わが家感が低くなるに連れ、「今後の住宅」の見通しの立たない人の割合は若干増えているものの、際だった違いとは言えない範囲である。「わが家感」への影響は限られている。

「わが家感」と回答者の「家族内の障害者の有無」「家族人数・形態」を比較した結果、「まあわが家と感じる」場合には、平均1.71人家族であるが、「全くわが家と感じない」グループでは、平均1.27人に減少している。また、「まあわが家と感じる」場合には、単身の割合は54.8%であるのが、「全くわが家と感じない」グループでは、72.2%である。「障害の割合」も「まあわが家と感じる」グループで、0.3%であるの

に対して「全くわが家と感じない」グループでは、33.3%と高い。

近所つきあいを見ても、「まあわが家と感じる」グループでは、「挨拶程度」と答えた割合が29.0%であるのに対して、「全くわが家と感じない」グループでは38.9%と増える。ふれあいセンターを「毎週利用する」割合と「たまに利用する」割合は、わが家感にあまり関係ないが、「全く利用しない」人が「全くわが家と感じない」グループにわずかに増えている。

このように、「わが家感」という個人領域の認識に、本人の健康状態をもとより、家族の存在や近所との交流といった人的環境の在りようも影響している結果が示された。

前節でみたように、人的な関わりがこうしたわが家感をもたらしていることから、仮設住宅におけるコミュニティの形成を考慮することが重要といえる。

9. 仮設住宅における「仮」の領域形成

阪神大震災によって建設された尼崎市の仮設住宅団地の71世帯を対象として、領域形成と仮設住宅への適応度を調べた。仮設住宅という環境における仮住まいの意識が、「壊れたままの家具を使う」、「引越してきたままの状態でも荷物を開けないで生活する」、「いずれ仮設から引越すことを考えて、買い控える」、「絵などを壁に掛けないで立て掛ける」、「釘を打たないでテープ等で貼る」などの領域形成に現れている。また、仮設住宅への環境移行は、個人領域と共有領域の双方を形成できることがスムーズな適応をもたらしている。災害後の住まいの建設においては、個人的な領域である住まいに対して、入居者が主体性を持ってコントロールできるようにすることは必須のことである。しかし、孤独死の問題に現れているように、災害後に新しい環境に適應する過程では、他者との関わりを再構築することが重要である。この点で、個人領域とパブリックな領域の間である1.5次元領域をいかにデザインし、コミュニティを再生させるのか、他者との関わりを促進させる、領域形成を促す設計が災害後の住宅に求められている。

参考文献

- 尼崎市 (1995) : 市報「あまがさき」震災特集版、第15号、p4
- 大村奈美、室崎益輝、越山健司 (1996) : 災害ストレスと生活環境の関わりに関する研究 - 阪神淡路大震災における応急仮設住宅居住者を例として -、日本建築学会近畿支部研究報告集、pp749-752
- 外山義 (1997) : 高齢者の住生活行動、「住行動の心理学」、朝倉書房、pp210-226
- 牧紀男 (1997) : 自然災害後の「応急居住空間」の変遷とその整備手法に関する研究、京都大学工学研究科博士論文
- 室崎益輝 (1989) : 災害時の住宅復旧過程に関する研究、日本都市計画学会学術研究論文集、pp91-96
- 室崎益輝他 (1984) : 応急仮設住宅の供給実態に関する研究 - 雲仙・奥尻にみる居住生活上の問題点 -、日本都市計画学会学術研究論文集、pp694-695

Study on personalization in private space of temporary housing units constructed due to the Great Hanshi-Awaji Earthquake

Ken MIURA, Dai WABUCHI and Masami KOBAYASHI*

*Graduate School of Engineering, Kyoto University

synopsis

This study surveyed environmental transition to temporary housing units constructed in Amagasaki city due to the Hanshin-Awaji Earthquake focusing on relation between residents' personalization and daily lives, and their feeling to temporary housings. Result shows that not only personalization in private space, but also daily activities such as farming in open space is critical to make a successful adaptation to temporary environment, increasing human tie in their community. As a conclusion new design guide should be reconsidered how to build the 1.5 dimension space in the view point of environment behavior research.

keywords: temporary housing units; private space; personalization; the Great Hanshin-Awaji Earthquake